絵画と文学

Junko Higasa

文学を全体的視野で捉えようとした夏目漱石は『吾輩は猫である』の中で、絵画について多くの知識を披露している。そして『草枕』では画工に、「那美さん」という固定点から動かない才色兼備新時代モデルを、あらゆる角度から描かせている。

漱石は『草枕』についてのインタヴューで以下のように答えている。「小説の定義が一定しているかは知らぬが、小説の目的は必ずしも美しい感じを土壌にしているものではないらしい。汚くとも不愉快でも一切無頓着で、世の中はこの位恐ろしいというような感じが伝われればよいのであって、それによって正直でなければならぬとか、悪いものに抵抗していかねばならぬとか、苦しさを忍ばねばならぬというように、世の中に立って如何に生きるかを解決するのが主であるらしい」「けれど文学は美を現す人間のエキスプレッション（表現）の一部分である以上、美しい感じを与えるものでなければならない。もちろん定義次第であるが、もしこの定義が誤っていなければ、美を打ち壊しても構わないものが傑作と言われることは不審である」と。それゆえ漱石は「ただ美しいという感じを与える」ことだけを目的として『草枕』を書いた。それ以外の意図はないという。もちろん出来上がった作品から読者が教訓を見出すこともある。けれど漱石は他の作品においても思いに任せて書いただけで、最初から教訓を含ませようという意図はなかった。もし教訓を含ませて、その意図するところが見えてしまったら、それは小説として失敗作であると言わなければならないという。

そこで油彩画を描く私はあることを思い出した。ある発表の場でN先生から「この作品は苦労の跡が見えなくていい。楽にさらりと描いたように見える」という言葉を戴いた。そのおっしゃるところは即ち「いくら苦労をしてもそれが画面に現れてはいけない」ということである。即ち完成した画面からは製作時の何らかの意図が見えてはいけない。それが露骨に見えるものは失敗作だということである。ところが実際私はその絵を描くのに何の苦労もしなかった。ただ描くことを楽しんだだけである。また最近描いた絵を見た人から「この絵を見た瞬間楽しくなった」という評をいただいたが、これも同様である。即ち作者の製作時の感情は紛れもなく観る人に伝わったことになる。しかしその作品は結果として見るとただの楽しみや美しさだけでは終わっていないことに気付く。絵画でも小説でも出来上がってみるとそこには説明可能な意味がいくつも現れていることがある。表現者自身の裡にある解釈が無意識のうちに投影されていて、それが対外的に伝わるのだろう。いわば見えない意図のようなもので、作者自身もあとからそれに気づいて驚く事さえある。それは最初から意図したものとは全く別物の自然の中から生まれたものであるがゆえに美しいのだろう。この経験は漱石の小説観に通じると思う。「美しいと感じること」それは人間の無垢な感性である。それを引き出すのが藝術の役割ではないだろうか？絵画や小説には「この作品をこう読み解くように」という正解があってはならない。真の藝術に決まった解答はない。観る人、読む人それぞれが、その表された世界の中から「美しいと感じる真実」を見出すものである。漱石が大衆受けを狙う文壇の流行に乗らなかったのは、まさに藝術の「真実の美しさ」を表現することを目的にしたからだと改めて感じた。(2013.2.16)